



 Data	2023-59
監督・脚本・製作: トッド・フィールド	
出演: ケイト・ブランシェット/ニーナ・ホス/マーク・ストロング/ジュリアン・グローヴァー/ノエミ・メルラン/ソフィー・カウアー/アラン・コーデュナー	

## みどころ

弁護士登録直後の1974年頃に、稼ぎにまかせてクラシックレコードを買い漁っていた私は、カラヤンもフルトヴェングラーも、そしてレナード・バーンスタインもよく知っているが、寡聞にしてベルリン・フィルを率いた天才女性指揮者リディア・ターは知らなかった。

しかし、それは当然。なぜならターは実在の人物ではなく、トッド・フィールド監督が女優ケイト・ブランシェットに“あて書き”をした脚本上の人物なのだから。もっとも、冒頭のインタビューで語られる輝かしき経歴を聞き、目下大活躍を続けているターの姿を見ていると“ホンモノ感”が顕著だから、騙される人も多いはずだ。

英語ではなくドイツ語での、ベルリン・フィルに対するマーラーの交響曲第5番のリハーサル風景はすごい。レズビアンを公言した私生活も築き上げた“ター王国”の一部だが、①某若手女性指揮者の自殺、②ベルリン・フィルの副指揮者の更迭、③ジュリアード音楽院の授業でのパワハラ(?)行為、④交響曲第5番のカップリング曲への新人チェロ奏者の抜擢、等々の“独断専行”が突出しすぎると、オーケストラ内の不協和音が広がったのは当然。そこにSNS上での炎上事件が加わるとターの苦境は?

本作ラストの注目は、失脚してしまったターによる“これは寓話?”と思うようなコンサート風景。この会場はどこ?演奏しているオーケストラは誰?

“アジアの風が吹いた”と言われる第95回アカデミー賞は、『エプエブ』こと『エプリング・エプリウエア・オール・アット・ワンス』(22年)が7部門を受賞し、本作はことごとく敗北したが、せめて主演女優賞だけはケイト・ブランシェットに獲らせたかった。そんな思いは私だけ・・・?

## ■□■第95回アカデミー賞の6部門候補作がやっと日本公開■□■

『シネマ52』では、巻頭特集として『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』（22年）（『シネマ52』12頁）を、第1章に「第95回アカデミー賞特集」を収録した。しかし、アカデミー主演男優賞に選ばれた『ザ・ホエール』（22年）の日本公開は4月7日、また、アカデミー作品賞、監督賞、脚本賞、主演女優賞等6部門にノミネートされた本作の日本公開は5月12日だ。

キネ旬報は毎年3月号で事前予想を、5月号で結果座談会を特集しているが、日本公開がこんなに遅いと、自著『シネマルーム』の目次構成に支障が出る上、キネ旬の特集の読み方自体が不完全になってしまう。なぜ本作のような大ヒット作の日本公開が遅いの？そこら辺りは、ハッキリ苦言を呈しておきたい。

## ■□■『TAR ター』って一体ナニ？それは女性指揮者の名前■□■

私が弁護士登録したのは1974年4月だが、その2年後の1976年6月に実現したのが、プロレスのアントニオ猪木 VS ボクシング世界ヘビー級チャンピオン カシアス・クレイとの異種格闘技戦。これは“凡戦”に終わったが、アントニオ猪木の「1・2・3、ダー！」の掛け声はいつ頃から始まったの？ここになぜそんなことを書くのかというと、「ター」という本作のタイトルを見て、何の映画かサッパリわからなかったものの、「ター」と聞いて、なんとなくアントニオ猪木のあの掛け声を思い出したためだ。

それはともかく、本作のタイトルとされている「TAR ター」は天才女性指揮者の名前だ。本作冒頭、インタビューに応じるリディア・ター（ケイト・ブランシェット）の前で長々と語られる彼女の経歴は次のようなものだから、そりゃすごい。

アメリカの5大オーケストラで指揮者を務めた後、ベルリン・フィルの首席指揮者に就任。7年を経た今も変わらず活躍する一方、作曲家としての才能も発揮し、エミー賞、グラミー賞、アカデミー賞、トニー賞のすべてを制した。師バーンスタインと同じくマーラーを愛し、ベルリン・フィルで唯一録音を果たせていない交響曲第5番を、ついに来月ライブ録音し発売する予定だ。加えて、自伝の出版も控えている。

また、投資銀行家でアマチュアオーケストラの指揮者としても活動するエリオット・カプラン（マーク・ストロング）の支援を得て、若手女性指揮者に教育と公演のチャンスを与える団体「アコーディオン財団」も設立し、ジュリアード音楽院でも講義を持つことになった。

そんな輝かしい経歴と現在の華々しい活動の様子を聞きながら私がビックリしたのは、ターがレズビアンであることを堂々と公言していることだ。そんな導入部では、ターの公的評価がよくわかったが、彼女の私生活は如何に？

## ■□■ターは実在の人物？寡聞にして私は知らなかったが・●■□■

私は1974年に弁護士登録した後は、稼ぎにまかせて(?)高級ステレオを買い、LP

レコードを買い漁っていたが、残念ながら、いくらレコードの数が増えても、それを聴く時間がとれなくなったため、独立した1979年頃にはLPレコードの購入を中止した。しかし、LPレコード購入については、それなりの情報収集が大切だから、クラシック大好き人間の友人と一緒によく聴き、よくレコード店に行き、よく議論を聞かせていた。したがって、本作冒頭のターの経歴紹介で語られている、マーラーの交響曲を全曲録音した指揮者、レナード・バーンスタインの輝かしい業績等については、私にも十分理解できた。しかし、天才指揮者リディア・ターという名前は寡聞にして知らなかった。

それは当然。なぜなら、ターは実在する人物ではなく、トッド・フィールド監督が16年ぶりに監督・脚本・製作した本作は、唯一無二のアーティスト、ケイト・ブランシェットに向けて「当て書き」した脚本に基づくものだからだ。彼は「ずっと＜何が何でも叶えたい夢＞が叶った途端、悪夢に転じるというキャラクターを描きたかった。もし、彼女が断っていたらこの映画は日の目を見ることはなかった。あらゆる意味でこれはケイトの映画だ。」とまで語っている。

### ■□同居中の女性は？アシスタントの女性は？自殺事件は？■□

大阪弁護士会でも「ゲイ」であることを公言し、男2人で同居している若手弁護士がいるが、ターが同居しレズビアンに関係にあると公言しているのは、オーケストラのコンサートマスターでヴァイオリン奏者の女性シャロン（ニーナ・ホス）。それだけでも「へえー」と思うのだが、ターとシャロンの2人は養女のペトラを共同で育てているからビックリ。冒頭に紹介されたように、あれほど多忙なターが自分で車を運転してペトラを小学校へ送っている姿を見ていると、私はこんなことホントにできるの？とってしまったが・・・。

他方、公的な仕事で忙しいターにはスケジュール調整をはじめとする有能な秘書が不可欠だが、本作ではそれをフランチェスカ（ノエミ・メルラン）が務めている。フランチェスカを全面的に信頼しているターは、財団のプログラムで指導した若手女性指揮者クリスタが自殺した事件に巻き込まれることを恐れて、彼女に関するすべてのメールを削除するようフランチェスカに指示したから一安心。他方、現在、オーケストラの副指揮者は古参のセバスチャン（アラン・コーデュナー）が務めていたが、フランチェスカは副指揮者を目指していたから、そこでひょっとしてターが公私混同の誤りを犯してしまうと・・・。

### ■□指導熱心？それともパワハラ？それは紙一重！■□

2023年5月19日付け新聞各紙は「太っしょん。まさに怪童」、「怪童、受け継がれる遺伝子」等の見出しで、旧西鉄ライオンズの4番バッター、中西太氏が90歳で亡くなったことを報じた。現役引退後にいくつかのチームで就任した監督としては成功しなかったが、その原因は、風貌から豪快な性格に見えるものの、意外に繊細で肝っ玉は名前のようには太くなかったためらしい。しかし、打撃コーチとしては天才的な能力を発揮し、人並み外れた熱心さと相まって、阪神タイガーズの掛布雅之や岡田彰布、そして、ロッテの田口壮等を一流打者に育て上げた。彼の場合は、打撃コーチとしてのそんな熱心が今で

も語り草になっているが、今や、教える側の熱心さは、教えられる側の受け止め方によってはパワハラやセクハラになってしまうから怖い。『セッション』（14年）（『シネマ35』40頁）で観た、シェイファー音楽院における、偉大なドラマーを夢見る19歳の主人公に対する鬼教師の指導ぶりがまさにそれだった。

しかして、本作前半、ジュリアード音楽院で講師を務めるターが、生涯に複数の妻と20人の子供を設けたバッハについて「性的にも人種においてもマイノリティーである自分には受け入れ難い」と主張する男子生徒に対して、「クラシックの作曲家はほとんどがドイツ系の白人男性よ」と容赦なく罵倒し、圧倒的な迫力で論破する姿は、指導（教育）熱心？それともパワハラないしセクハラ？この2人のやりとりは長時間に及んだが、本作後半、彼の携帯から拡散されたSNSの動画は、彼が有利になるような部分だけ繋ぎ合わせたものだったから、ターのパワハラぶりは歴然！これではターがいくらどのような弁解をしても、所詮アウト・・・？

### ■□■ある日から身体に異変が！周辺でも不穏な動きが！■□■

“楽聖”と呼ばれたベートーヴェンはある日から耳に異変が生じ、晩年にはほとんど聞こえなくなってしまうが、ターの目の回るような忙しさを見ていると、そのストレスは如何ばかり！ベルリン・フィルの指揮者としてすべてを牛耳っているターの目下最大のテーマは、一方でマーラーの交響曲全曲録音に向けて第5番のリハーサルを続けながら、他方で新曲の作曲を完成させること。ところが、副指揮者のセバスチャンのクビを切ろうとした時あたりから、どことなく不協和音が……。ペトラを車で小学校に送り迎えする時間はいくら忙しくてもストレス発散の貴重な時間だが、作曲における“産みの苦しみ”は想像を絶するもの。その上、交響曲第5番のリハーサルにおけるターの要求はこれまでより遙かに高かったから、自分の思う演奏になかなか辿り着けないストレスもすごかったらしい。

そんな状況下、ターの身体に生じた異変は耳。この変な音は、どこの部屋から？いや、ひょっとして、これはターの幻聴？そんな悩みが続く中、規則正しいリズムの音で目覚めたターが音の出どころを探ると、書斎のメトロノームがつけっ放しになっていたから、アレレ。この犯人がペトラの遊び心によるものなら許せるが、ペトラは誰も入れない書斎には入っていないそうだから、これは一体誰が？

他方、クビにしようとしたセバスチャンからは、「関係のあるフランチェスカをひいきにしているためだ」と公然と非難されたからアレレ。さらに、そのフランチェスカもターの命令に背いてクリスタからの抗議のメールを削除していなかったから、さらにアレレ。これらは一体なぜ？このように公私共に不協和音が続き、不穏な動きが強まっていったが、さあ、ターはどうするの？

### ■□■オルガの抜擢がさらなる不協和音を！苦境の深まりは？■□■

マーラーの交響曲第5番の録音は公開演奏をそのまま録音するものだから、カップリングの曲が必要。そこでターが選んだのが、エルガーのチェロ協奏曲だ。私は「新世界」で

有名なドヴォルザークのチェロ協奏曲が大好きだが、エルガーのそれは知らない。それはともかく、カップリングにどの曲を選ぶかはターの専権だが、その奏者は当然、オーケストラ内のチェロの第一奏者というのが暗黙のルールだ。ところが、ターはその奏者を「オーディションで選ぶ」、「団員は誰でも参加できる」と宣言したから、アレレ。そんなことをすれば、副指揮者セバスチャンの解任で不協和音が強まっているオーケストラがさらに分裂していくのでは・・・？

そんな心配をしていると、案の定、ターはオーディションで発掘したチェロ奏者オルガ（ソフィー・カウアー）をエルガーのチェロ協奏曲のソロ奏者に選んだから、ヤバイ。若い彼女は輝くばかりの才能にあふれていたうえ、何事にも物怖じしない奔放な性格はまさにターにピッタリだったらしい。しかし、そこでの問題はセバスチャンを副指揮者の地位から排斥してフランチェスカを抜擢したのと同じように、オルガの発掘が先だったの？それともオーディションのアイデアが先だったの？ということだが、その真相は・・・？

オーケストラの中に不協和音が広がる中でも、ターはマーラーの交響曲第5番とエルガーのチェロ協奏曲のリハーサルに全力を傾注していたが、ターの苦境の深まりは・・・？

## ■□■クリスタ問題が告発へ！SNS上でも大炎上！■□■

ようやくリハーサルが完成に近づいた頃、ターは財団からクリスタの自殺に関して弁護士に連絡するよう指示されたからビックリ！クリスタの自殺に関しては、巻き込まれるのを防止するべく、関係するメールをすべて削除していたのではなかったの？ターはフランチェスカにそれを指示・厳命していたのでは？もし、それをフランチェスカがしていなかったとすれば、それは一体なぜ？フランチェスカに何らかの思惑があるの？

他方、冒頭に見たジュリアード音楽院の講義で、ターがある男子学生に示したパワハラまがいの授業風景がSNSで拡散され、それが大炎上したから、さあ大変。近時、日本ではジャニーズ事務所の元社長ジャニー喜多川氏による元所属（男性）タレントへの性加害問題が大きな社会問題になったが、こんな事態になれば、ターもアウトだ。ジャニー喜多川氏の場合は本人が死亡した後の“醜聞発覚”だったが、ターの場合は指揮者として、音楽家として絶頂の地位にあった時の“醜聞発覚”だから、そんなターの転落は早いはずだ。ある意味で“人の不幸話”は楽しいものだが、本作ラストでターが指揮棒を振っているのが、あっと驚く舞台、演奏しているオーケストラもあっと驚くオーケストラだから、これにはビックリ！トッド・フィールド監督は本作をなぜ、あえてこんな寓話的(?)なエンディングにしたの？本作の鑑賞については、それをじっくり考えたい。

## ■□■『エブエブ』に敗北！私なら主演女優賞は『ター』に！■□■

第95回アカデミー賞は10部門11ノミネートの『エブエブ』こと、『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』（22年）が作品賞、監督賞、脚本賞、編集賞の他、主演女優賞、助演男優賞、助演女優賞の計7部門を受賞した。

そのため、作品賞、監督賞、脚本賞、撮影賞、編集賞、主演女優賞の6部門にノミネー

トされていた本作は、無冠に終わってしまった。アカデミー賞は近時、“白いオスカー”とか“黒いオスカー”と呼ばれ、人種問題を中心にさまざまな議論を呼んできたが、第95回は“アジアの風”が吹いた(吹きまくった)らしい。私は『宋家の三姉妹』(97年)、『シネマ1』59頁、『シネマ5』170頁)、『グリーン・デスティニー』(00年)、『SAYURI』(05年)、『シネマ9』59頁)のミシェル・ヨーが大好き。そんなミシェル・ヨーがアジアの七変化、大和撫子七変化ならぬ、“84変化”を演じた『エブエブ』は面白かったけれど、ハッキリ言って私にはチンプンカンプンの映画。したがって、同作と本作のどちらが作品賞、監督賞、脚本賞に相応しいかというと、私は本作だ。

さらに、本作における①後に SNS が炎上して大問題になったジュリアード音楽院でのある授業風景、②英語ではなくドイツ語をフルに使っての、ベルリン・フィルを率いたターのマーラーの交響曲第5番のリハーサル風景、③エルガーのチェロ協奏曲のソロ奏者を選ぶためのオーディション風景、等々の“公の姿”はもちろん、④シャロンとの同性愛を公言しているターの私生活の風景、⑤シャロンと共同で育てている養女ペトラを学校に送り迎えする風景、等々の“私の姿”を見ていると、本作でター役を演じたケイト・ブランシェットも八面六臂の大活躍だ。音楽映画において指揮者やピアノ奏者、バイオリン奏者等を演じて人気を博した俳優はたくさんいるが、本作でター役を演じたケイト・ブランシェットに勝る俳優はそうそういないはず。そう考えると、私が考える第95回アカデミー主演女優賞は『エブエブ』のミシェル・ヨーではなく、本作でター役を演じたケイト・ブランシェットだ。

2023(令和5)年5月23日記